

「ミスター・ヴァーティゴ」

ポール・オースター著、柴田元幸訳

読者は物語を前に、多くは次のどちらかをたどる。一つは、自「自」の体験、もしくは疑似体験をストーリーから見つけ、感情の葛藤や共有を楽しむ。もう一つは、まったく非日常的な出来事を読む中で、人生における夢や希望、絶望といったものをわかりやすく味わう。もちろん、両者とも良質なら、魂の深淵に属れることは可能である。この作品は後者に属し、ファンタジーに近く、一九九四年に書かれた。

両親もなく、暴力と酒浸りの伯父のもとで暮らす少年ウォルトは九歳のとき「今のままでしたら冬が終わる前に死んでしまう。私と一緒に来たら、空を跳べるようにしてやる」と曲芸の師匠にひろわれる。それから過酷な特訓をするため、同じく厳しい環境から連れてこられた仲間との生活と修業に入っていく。だがここでのテーマは、鍛錬克服と成功話ではない。人と人の根底からの関係回復である。

まったく見ず知らずの他人たちが、家族にはできぬ繋がりをつくりあげていく。そのため個々の感情の機微が細かく描かれ、「俺はけどもの同然、人間の形をしたゼロだった」と決めつけていた主人公が、己を信じ、変貌していく。それは、ある日、師匠の姿がないことから、過去に経験したことのない悲しみと孤独にさいなまれ、周りの世界から隔絶を感じたとき、初めて空中浮揚を成功させることにも象徴される。人間感情をとり戻すこと、それこそがもっとも必要な条件だったのだ。

ところが、いよいよ最終目標のニューヨーク公演を直前にひかえ、空中からの着地後、異常な頭痛に襲われた。それは十四歳(思春期)への成長が原因であり、飛翔を断念し、第二の人生を迎えねばならぬ合図でもあった。これまで自分さがしをいつけてきた作者は、ここでは、既存そのものから存在の証を見つけないでなく、行動しながら関係をつくり、新たな自己を発見する命題に取り組んでいる。少年が生きぬいていく場は、個が閉塞した都市の縮図だ。アメリカを代表する作家オースターが同時多発テロ後、さらにどんな物語を紡ぎだすか注目せずにはおれなくなっている。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)



ミスター・ヴァーティゴ
MR. VERTIGO PAUL AUSTER

ポール・オースター 柴田元幸訳 新潮社

新潮社・2400円